

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 162号

平成27年10月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

「小西芳之助金曜会・同志会日誌語録」より (11)

目の前に落ちてくる仕事をする

コリント前後書とロマ書12章伝えられていることとは同一である。愛の秘訣は“献身”である。主イエスを信じて救われたのだから、本当に信、望が分かったのだから、これに従わねばならない。そうして初めて生きた信仰となる。“捧げよ”とは現実には十字架の贖いによって救われた、復活して天国への道中にある我々は目の前に“落ちてくる”仕事をすることを意味する。…イエスキリストは30年間準備して3年間伝道された、パウロは50年間準備して30(10?)年間布教した、内村鑑三は40年間準備されて15年間宣教されたことに因んで、私は70歳まで準備して7年間立派な聖書の講義をする。

(昭和39年10月2日 金曜会)

永遠の命をめがけて毎日の義務をやること

今日朗読した「兄弟たちよ、そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神によろこばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である」(ロマ書12章1)の献身ということは難しいことではない。日々の小さな義務を行なうこと、やること、Do!! ということだ。これが献身だ。決して難しいことではない。即ち天国をめがけて、永遠の命をめがけて毎日の義務をやることだ。Do!!ということだ。

(昭和39年11月13日 第62周年記念祭)

名人の碁に妙手なし

ラジオで碁の名人橋本雄二郎九段の話を聞いた。彼は50年間碁を打ってきた。碁には碁の原理があってその原理で暮らしてきたということだ。私も18年間聖書を読んではいるがまだ聖書の原理で生きているとは言えない。出来たら名人の如くに暮らしたい。また名人曰く「名人の碁に妙手なし」と。良いこと。大切なことだ。普通の手、普通の生活、平凡なこと、これをキチンキチンと誠実にやっけて行く。その時にキリスト教の原理で暮らせたなら本当の名人だ。

(昭和40年1月29日 金曜日)

内村先生の伝記の感想

内村先生の伝記について説教したことについての感想。内村先生の70年の生涯をみて先生の真の伝道は59歳の時に始まったと言って良いと思う。そのため実に60年間準備をされたような気がする。先生の最盛期に講義を聞いて感激したが、その当時はそんなに偉いとも思わなかった。しかし今にして先生の福音の理解の深さに打たれる。聖書、福音の理解には相当の年月がかかるものだとしみじみ思う。先生は12歳まで儒教の厳しいしつけを受け、17歳にして福音に接し猛勉強をしバプテスマを受けて10年位して、一応理解したということです。52歳の時に一人娘を失って初めて復活ということが分かったのである。聖書を理解するのに何と50年もかかっているのである！娘の死は先生の信仰に大きな寄与をしているのである。…

このように聖書理解には時間がかかるものだ。君達も決してあせってはいけない。…自分の努力によって信仰が生まれるのではなく全く神の恵みだと内村先生も言われている。信仰は分かれば何物にも代えられない宝となる。君達は投資しているつもりであせらずに求道し、信仰と永遠の生命を自分のものとして体得して下さい。

(昭和40年4月30日 金曜会)

結婚をなさんとするお二人に言う

うちの教会の青年が結婚式を挙げるので、今日は式の予行演習ををさせていただきに来た。

結婚をなさんとするお二人に言う。「あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物として捧げなさい。それがあなた方のなすべき霊的な礼拝である。」(ロマ書12章1節)とある。これは神に喜ばれる生活としての献身の勧めをした個所である。天国に行くことを目的として日常目前の義務を尽くしなさい。

このことは次の二つのことを言っている。第1は人として最も祝福された生活は、その身を聖き供え物として神にささげることである。第2に平凡のように見えることを努めることは至難のことである。このためにも第1のことが必要である。平凡なことを誠心誠意やること、これが大切である。結婚は平凡であり、美しい結婚は平凡な結婚である。

「たといたくさんの物を持っていても、人のいのちは、持ち物によらないのである」(ルカ伝12章15) イエスはその弟子に所有の少ない無学のただ人を選ばれた。目の前の義務を尽くす、死をもってしても尽す。彼等は天国に行くことを目ざしていた。この力はここか

ら湧き出ずるものであって、所有の増加のために狂奔する過ちを犯してはならない。

祝いの歌（独唱）“限りなき命持ちたるいとせの契りのむしろを神ぞ祝せよ”

私は高等学校時代、本郷の桜の下のグラウンドの隅で友達と祈った。3人共洗礼をうけたが3人のうち私一人信仰が残っている。あとの二人は偉くなるにつれ忙しくなり、教会へも行かなくなった。“咲く花は多し、実になるは多し、されど熟するは少なし”

どうぞ最後まで信仰を捨てないでほしい。信仰は聞くことから生じる。神の言葉を聞くことが信仰の秘訣である。神の言葉を終生聴き続ける。

希望の歌（独唱）“主イエスよと呼び手励まん今日もまた手にくる技を御国目当てに”

（昭和43年5月17日 金曜日）

（注 この結婚する教会員とは、実は私（山口周三）のことである。私たちは、昭和43年5月18日、小西先生司式の下で、神田美土代町の東京YMCAで結婚式を挙げた。）

洗礼の勧め

今日 5 月 31 日は、私の 70 歳の誕生日である。…

① 勧め—洗礼の勧め。今まで 50 年の生活（6 月 2 日は受洗 50 周年の日）で人に洗礼を勧めたことはなかった。しかし 1968 年正月から半年にわたる病気により心境が変化した。信仰は人間側の決心、求道心、聖書の勉強によるのではなく、神が下さるものであると分かった。…賜物はキリストのことば、聖書の言葉から来る。

「信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである」（ロマ書 10 章 17 節）そやから聖書を学ぼうという気になったら洗礼を受けよと勧めたい。自分の心がどうだろうとか、何とかいうのは考えないでよい。本当にこれから聖書を学ぼうという気があるのなら、明日明後日にも洗礼を受け給え。聖書を勉強しなかったら、牧師でもなんでも地獄へ行くぜ。牧師、伝道師でも真剣に聖書の勉強をしていない。内村先生は聖書の勉強だけをしていた。これはよかったと思う。…イエス様守って下さいと毎日祈る。守ってくれるか出来ないか知らんよ。ただ聖書の中でイエスが祈れと言っているから祈るのである。洗礼を受け給え。無条件に受け給え。

（昭和 43 年 5 月 31 日 金曜日）

一つの聖句に人生をかける

私の神信心はキリストを信ずることである。聖書の言葉を通して。言葉を信じている。私の信仰は実に簡単。聖書が私にとって大きな存在である。Bible を死ぬまで離すな。Bible は自分で読むと我流になり、好きなところしか読まぬ。注解書を読む必要がある。死ぬまで Bible を学び続けることが出来たら、それだけで同志会に来た価値はある。一日3分でも5分でも良い。毎日読め。黒崎先生の注解書は外国語の注解書に劣らぬ。

信仰50周年を祝い、自分の信じている、自分の実行している聖句、自分はキリスト教をどう信じているかの聖句に関して感想を書いて欲しい。私は聖句を大切にする。

神を信ずると言うことは何も難しいことではない。研究することではない。思索することではない。一つの聖句に人生をかける。命をかける。死ぬまで Bible を離したらいかん。10年コリント前書を毎日勉強したらその人の一生は必ず変わるであろう。Bible は実に力がある。聖霊の書である。虚心坦懐に学ぶべし。大注解書と共に毎日少しずつ学ぶべし。宗教は命の問題、道徳以上のもの、もっと真剣なものである。

(昭和43年9月13日 金曜日)

聖霊の力

耳が聞こえなくなったような気がする。これは不便なようで便利である。自分で好きなことをしゃべれる。この新年会はもう数十年も呼ばれている。…聖書の話をすることにします。

イエスキリストは自分は神の子であるという信仰を持っていた。そして彼の人生が終わったら父のもとへ帰ることを望んでいた。その人生は自分の人生ではなく、父の人生であった。新・望・愛、この3つが神の子の信仰ではないだろうか。神の恵みであって、自分の努力はない。ただ忍ぼうとしてキリストにへばりついておきなさい。そうすれば私のようになる。いや私はなってしまったのだ。

私は神の御旨によってここに来ている。我々が spiritual なものを求めるのは奇蹟だ！ 諸君！ 信仰は奇蹟だ！ これが確立したらこの世で恐れるものはない。たとえ死であっても神の教える技をできる。その力は復活の望みから来たのである。君達の側に霊的な素質を受けられないのは当たり前。聖霊がその力をもつ。それが我々に働いてくるので、君達はキリスト教を捨てずにへばりついていなさい。私のような駄目な人間にもやってきた。君達にもやってくる。

(昭和 44 年 1 月 24 日 金曜日)

復活はキリスト教のポイントである

今日は最後の金曜会であるし、また私にとって 51 回目のイースターです。キリストの復活の意義については、コリント前書 15 章に書いてあります。カルヴィンは、パウロがこの 15 章を書くためにコリント書を書いたのだと言っておりますが、私はパウロの書簡が全部このために書かれたのだと思います。

福音書が十字架の復活を書こうとしていることと同じなのだ。復活はキリスト教のポイントである。人間の考え方では理解できない。理性を越えている。君達は今直ぐに復活を信じることは出来ないであろうが、復活は聖書のポイント、「主は、私たちの罪過のために死に渡され、私たちが義とされるために、よみがえらされたのである (ロマ書 4 章 25)」があることを銘記しておけ。キリストの復活は我々の復活を意味するのである。

人間はイエスの復活によって救われるというのが福音の essence である。我々の方に神が求められているのはただ信じることのみである。従ってこれは万人に可能なことなのだ。とにかく今分からなくてもよいから、福音の中心が何であるかを心に留めておいてほしい。

(昭和 44 年 4 月 11 日 金曜会)